

論壇

30年に1回の新時代

世界経済の展開を少し長い期間で眺めてみると、30年に1回程度、その潮流が大きく変わって来たように見える。第2次世界大戦直後にブレトンウッズ体制ができ、米国を中心とした西側経済の秩序が形成された。IMFの下で各国の通貨はその為替レートをドルに固定する固定為替レート制が導入された。貿易についてはGATT(関税と貿易に関する一般協定)の下で貿易自由化が進められていった。ただ、それは基本的に管理されたものであった。農産品は貿易制限が厳しかったし、多くの途

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

上国も保護主義的な政策を維持していた。

世界のシステムが大きく変わるのが、1970年代の初めだった。米国のニクソン大統領が金とドルの交換を停止したのを受けて、ドルを中心とした固定為替レート制は崩壊する。世界は変動レート制という荒波にもまれること

世界経済の「転換期」

になる。この時期、円レートはそれまで25年ほど続いていた1ドル1360円という固定レートを離れ、日本経済は田高への移行の中で苦しむことになる。70年代には、2度の石油ショックも起き、日本経済は狂乱物価に翻弄された。

世界経済が次の大きな転機を迎えるのが、90年前後である。89年にベルリンの壁が崩壊し、多くの社会主義諸国が民主化と市場経済化に向かって動いた。95年に成立したWTO(世界貿易機関)の下で、中国などの新興国がグローバル経済に本格的に参入を始めた。以来、人・物・金が国境を越えて

過度な悲観主義禁物

激しく動くハイパー・グローバル化が世界に広がっていった。今、こうしたハイパー・グローバル化の30年が新たな時代を迎えようとしているように見える。ベルリンの壁が崩壊して米ソの冷戦の時代は終わって、世界に平和が訪れるという期待感があった。しかし、

現実には米中対立という新たな冷戦構造が始まっているように見える。中東でも紛争が続いている。世界の多くの国で独裁者の政治家が出て来て、民主主義的の抑圧が起きている。グローバル化を主導して来た米国も、トランプ政権の下で保護主義的な政策を進めている。

このように今世界で起きていることを並べてみると、暗い気分になつてくる。30年前にベルリンの壁が崩壊したときに感じた高揚感が感じられない。世界が大きな潮流の変化に直面していることは確かだが、その先に明るい未来の姿を描くことができないから

もっとも、過度な悲観主義は禁物だ。フランスの思想家であるアラランがこう指摘している。「悲観は感情から生まれるものであるが、楽観は意思でつくるものである」と。感情的に世界の将来を見るのではなく、明るい未来のために何ができるのかという姿勢が大切だと、アラランは言っている。

今この瞬間にも、香港の若者は自分たちの将来の自由と民主主義のために戦っている。悲観は走るのではなく、なんとかが明るい未来に向かって走ろうとしているのだ。世界の大きな動きに比べれば、一人一人のことはあまりにも小さいのかもしれない。それでも、今世界で何が起きているのか、しっかりと観察しなくてはならない。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。